

編藏虎村田

國定
小學
讀本
唱歌
高等科
三學年



225

K120.73
36
3
196.650

K120.73

36

3

緒言

國定の小學讀本中の韻文はさすがに教育的に出来て居て唱歌教材にも十分應用し得るものと思ふ。余は是等韻文に曲節を附して余が奉職せる東京高等師範學校附屬小學校の兒童に教授する考であつたが、たまたま修文館主も余と同じような意見を持して居るので、文部省の許可を経て茲に本書を公にすることになりました。

惟ふに、このころ唱歌書類が續々と出版されます故、是等の教材を各學年の程度に合わせて取捨選擇するは随分手数のかかることである。然るに、國定の小學讀本中の韻文は、程度を逐うて出来て居る事は勿論、國語教授で、その意義をも兒童が十分會得して居るから、甚くとも歌詞だ

内容

けには、前述のような心配のなきのみならず、児童をして、眞の興味を起させ、所謂教育的教授が出来ることと思ひます。

余、數年小學教育に従事して、聊か唱歌教授上に經驗もある故、この書を公にして、大方の批評を乞ふ事となつた。若し、この書が、唱歌界に幾分なり貢獻する所があるならば、余の光榮とする所であります。

猶、本書を編纂するについて、編者の用意を一言すれば、

一、曲節は、余が數年の實驗に徴して、兒童の嗜好に鑑み、その程度を考へて、順次、音樂上の發達を圖ることに力め、凡て、前後の連絡を保つように作つてあります。

一、韻文には、朗讀的と唱歌的との二種がある。例へば、國定の高等小學讀本中、一の卷にある、浦島子の如きは、朗讀的韻文であるから

本書にはこれを省いたのであります。

一、本學年は、前學年に引續いて、程度を高め、新たにスタッカートと短旋法と、且つ六拍子とを加へたれば、教授者は、茲に注意されんことを望みます。

一、本書中、一音符に二文字を配當してあるのは、その音長を二等分するのであります。

明治三十七年十二月二十日

編者 識す

小國定
學讀本
唱歌

高等科三學年

目次

氣のかはり易き男	三
母の愛	十
びらみっど	十七

氣のかはり易き男

(變る調四拍子)

輕快 =

稍早ク

50503. 2 | 1 7 6 1 2- | 50501. 3 | 2- 0

1. ヨニナロ カ- ナ- ル ナトコ ア リ
2. ナレドモ ヒ- ビ- ニ ナホヒ ナル

30301. 3 | 3 2 1 7 6- | 2 5 5. 6 | 5- 0

ハジメハ ソ- マ- ニ ナリタル ガ
ノコギリ モ- ツ- ガ クルシト テ

30306. 1 | 6 5 3 4 5- | 30306. 1 | 5- 0

シニトル シ- ノ- ガ オモシト シ
マタモ- コ- ビ- キテ リナステ テ

60695. 3 | 4 5 6 7 | 1 5 | 3 3 2. 3 | 1- 0

シメテ- コ- ビ- ト カハリケリ
コンドハ ヌ- イ- クト カリニケリ

氣のかはり易き男

世に愚なる男あり。

はじめは、そまになりたるが、

手にとる斧のが重しとて、

やめて、木挽ひきとかはりけり。

二 されども、日々に、大いなる

鋸のこぎり持もつが苦しとて、

「またも、木挽をうちすて、

今度は、大工となりにけり。」

三

大工は手斧があぶなしと、

恐れて、次は、家根屋業。

屋根の高きに驚きて、

これもつづかず、つとまらず。」

四

次には、かはる疊さし。

とこ厚しとて、これもやめ、

鍛冶屋になりてみたれども、

夏の暑さに困りたり。」

五

農夫となりて、田を作る、

その職業をはじめしに、

「こえ臭ければ、いや」といふ。

さて、その次は何なるぞ。」

六

杵重ければ、米搗も、

少しの間にて見限りつ。」

紙屑拾かみくずひろいをはじめしが、

賤ひくいしきわざとて廢はげしけり。

七 あゝ思おもなるこの男。

今はなすべきわざもなし。

若き昔の怠おろそを

悔くひて、泣なけども、いかにせん、

八 身みは、はや老おひて手てはきかず、

人の惠めぐみをたのみにて、

ちまたに叫こゑび、門かどに乞こひ、

つなぐ命いのちのあはれさよ。



母の愛

(は短調二拍子)

悲壯 =

中等 =



3. 3 3. 3 6. 6 6. 3 6. 7 1. 6 7. 0

1. シ シ ハー ナリ ヨリ ニ ア デ タ ヲ
2. コ コ ニー ホ ト リノ ナ サ ナ ハ



3. 3 3. 3 6. 6 6. 3 6. 7 1. 7 6. 0

ク ツ ノー ク サ リ ナ ハ キ キ ッ テ
ハ ハ ノー テ モ ト ナ タ ナ ハ ナ



2. 2 2. 3 1. 1 3. 3 1. 1 3. 2 3. 0

コ ナ ハー ヲ ト ツ ニ カ ナ ル ナ ヨ
ホ ノー ト ヲ ニ ナ リ シ ガ

九

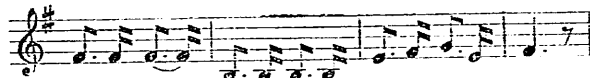


6. 6 4. 4 6. 6 2. 2 3. 3 3. 3 6. 0

ア ナ シニ ア ヨ ト サ ケ ヲ コ ク
ア ソ ビノ ニ ア ノー サ メ ノ リ サ ニ

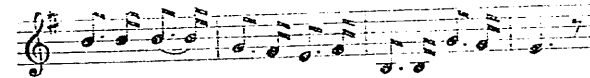
母の愛

(つうき)



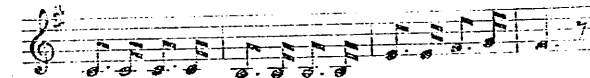
7. 7 7. 7 3. 3 3. 3 6. 7 1. 6 7. 0

コ コ ナー キ ク ヨリ ナ ノ キ ア
コ コ ニー キ バ ハ レ ニ ア ホ ト



3. 3 3. 3 1. 7 6. 7 3. 3 1. 7 6. 0

タ レ モー リ ガ ヤ ニ カ ク コ ミ ス
コ エ モー ミ ミ ニ ハ イ ク ザ



4. 4 4. 4 3. 3 3. 3 6. 6 7. 1 7. 0

メ ナ ハー タ ナ マ ナ シ ヲ マ リ タ
メ ナ レ トー タ ハ レ ヤ タ レ ヒ ト



2. 2 2. 3 1. 4 3. 3 1. 1 7. 7 6. 0

ヒ ト カ ア モ ナ ター ナ ノ ニ ケ
コ ヤ ツー タ ス ター コ ノ ニ ナ

八

母の愛

十

一 「獅子は、檻より逃げ出たり。

鐵のくさりを引き切つて、

こちらへ來るぞ。かまるなよ。

あぶなし。逃げよ。」と叫ぶ聲。

聲を聞くよりをのゝきて、

誰も、わが家にかげこみぬ。

街は、たちまちしづまりて、

人影もなくなりけり。」

二 こゝに、一人の幼子は

母の手許をたちはなれ、

井のほとりに居たりしが、

遊のわざの樂しさに、

心奪はれ、「逃げよ。」との

聲も、耳には入らざりき。

されど、あはれや、誰、一人、

行きて助くるものもなし。」

十一

三

獅子はたけりにたけりつゝ、
狂ひまはりて吼ゆる聲、
いよく、近くなりたれど、
なほ幼子は餘念なし。

つひに來りぬ。そのそばに。

眼はもゆる火のごとく、

爪は劔をとぎたてゝ、

ただ、一口と飛びかゝる。」

四

このとき、髪をふりみだし、

走り出でたる一婦人、

見るより、誰も叫びたり。

「あぶなし。止めよ。ひきかへせ。

行きなば獅子の餌となるぞ。

あー。不運なる子の母よ。

行くとも、もはや救はれじ。

行かば、二人が殺されん。」

五 婦人は耳にも入れずして、

怒れる獅子に飛びつきぬ。

すてにくはへし幼子を、

獅子の口より奪ひとる。

獅子は驚く、そのひまに、

その子は無事に救はれぬ。

かくて疵きずだになかりしは、

母の慈愛じあいにほかならず。

六 この有様を見し人は、

老ひたる若きおしなべて、

母の慈愛の一念を

強きものぞと感じけり。

今までふるひをのゝきし、

他の子の母もいひけるは、

「われも、わが子のためならば、

いかで命を惜まん」と。

ひらみど

(變は調八分の六拍子)

快活 = 正シク

5 6 5 3 | 2 1 2 3 | 2 1 6 1 | 5. 5 0 |

1. エジプト タイコノ アンメイ ノー
2. ヤマト ミユレド ヒラミツ ドー

6 6 1 5 | 6 6 1 3 | 2 2 3 2 | 1. 1 0 |

オモカゲ ノコル ヒラミツ ドー
イシモテ タタミ キンキタ ルー

5 5 1 5 | 6 1 6 3 | 4 4 5 6 | 5. 5 0 |

ナールノ キシノ コサコサ ニー
ホースイ ケイノ トニシ ター

3 5 6 5 | 1 1 6 4 | 5 3 2 3 | 1. 1 0 |

ヤマカト バカリ ソビエタ リー
ダイジョー オコロ シチジュー キー

ひらみど

一 えじぶと太古の文明の

面影残るひらみど、

ないるの岸のをちこちに、

山かとはかり聳えたり。

二 山と見ゆれどひらみど、

石もてたゝみ築きたる、

方錐形の塔にして、

大小、およそ七十基。

三 「大なる一基築くには、

十萬人のたゆみなく、

三十年もかゝりてぞ

成しとぐべき」と世にはいふ。

四 そも、この塔はえじぶとの

國王一家の墓にして、

その墓ごとに石柩を、

地下のむろにぞをさめたる。

五 石柩中のなきからは、

三千年後の今も、なほ

くづれくされずそのままに、
みーらとなりて残るとぞ。



明治三十八年一月二十四日印
 明治三十八年一月二十七日發
 明治三十八年三月二十五日訂正再版印刷
 明治三十八年三月二十九日訂正再版發行

國定 讀本唱歌
 高等、各金五錢
 二、三、四

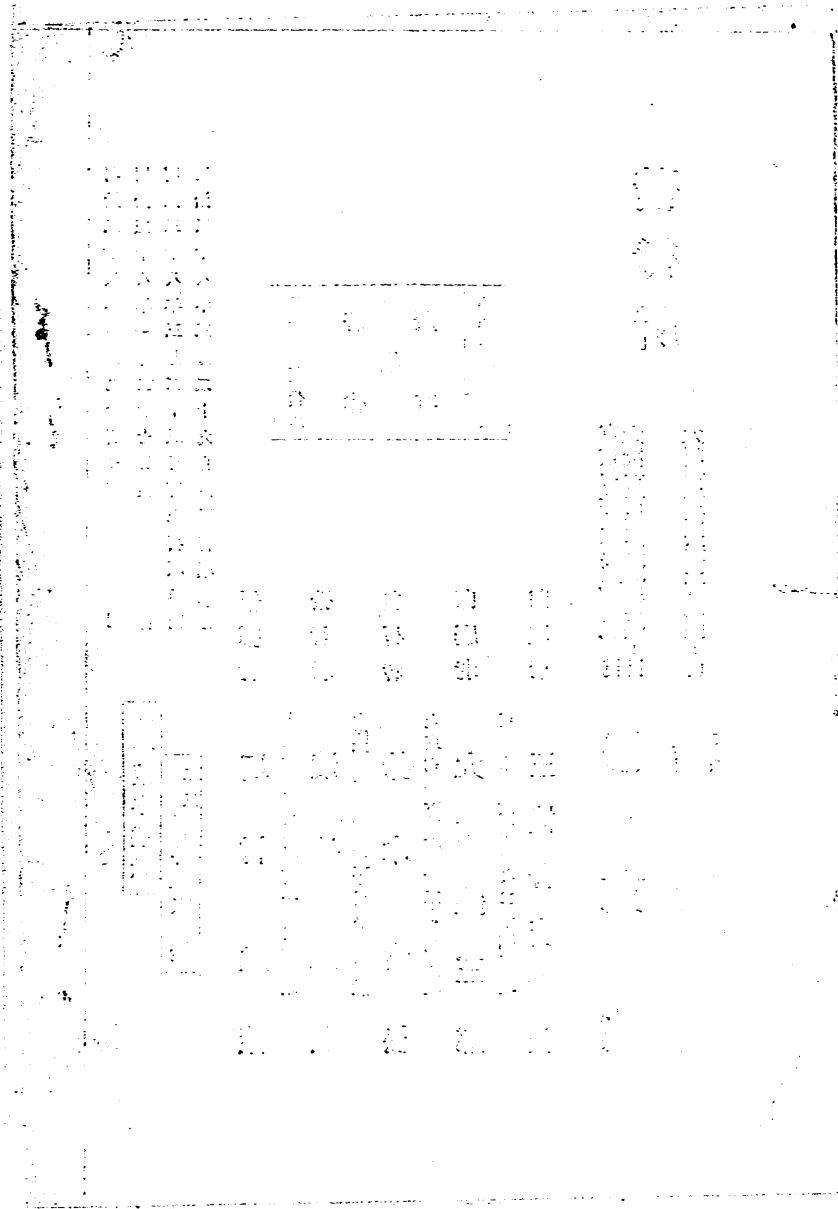
不許筆記代用	著作	不許複製轉載
所有	所	有

編纂者 田村 虎藏
 發行者 渡邊 鐵藏
 發行者 鈴木 常松
 印刷者 大西 鍊三郎
 印刷所 三協合資會社

東京市神田區錦町二丁目
 大阪府南區鹽町通三丁目
 東京市東區安土町四丁目

修文館
 積善館

發行所



Faint vertical text on the left side of the page, possibly a header or column label.

A small rectangular box containing faint text, possibly a title or a specific section header.

A vertical column of faint text on the right side of the page.

A row of faint text or numbers, possibly a header for a data row.

A large block of faint text, possibly a main body of data or a detailed description.

A row of faint text at the bottom of the main content area.